シリーズ「共に絆を深める」①互いを尊敬し合う　　ローマ 12:10

この秋は日本中、一気にラグビー熱が高まりを見せていますね。私もラクビーに惹かれる一人です。ついに一週間前に南アフリカに日本は敗れてしまいました。まだこれから準決勝、決勝とありますが日本の試合が無いととても寂しい気がしています。ラグビーの試合を見たり、関連のものを見たり聞いたりしていると何か他のスポーツとは違うものを感じます。それは何だろうと思っていましたら、負けた方はもちろん負けたことの悔しさはあるでしょうが敗者の惨めな雰囲気、うかつに声をかけられないような固まった表情が無いように感じるんですね。また勝った方も勝ち誇ると言おうか、おごり高ぶりをあまり感じません。いわゆるノーサイド、試合が終われば選手も審判も含めて皆、同じ仲間という伝統があるからかも知れません。日本のリーチ主将が南アフリカに負けた時、今の気持ちを聞かれた時に「相手が強かっただけです」と答えていたのが印象的でした。偏見かも知れませんが、スポーツに関して一般的に「勝てば官軍、負ければ賊」ではありませんが勝ちさえすれば何でも許される、負ければ何も言う資格が無いかのような社会風潮の中にあって新鮮に映りました。そしてラグビーだけをよいしょするつもりは無いのですがこのスポーツには尊敬、リスペクトということばが根底にあるような気がするのです。同じチームの仲間への尊敬、監督、コーチ、スタッフへの尊敬、相手チームへの尊敬、審判への尊敬、応援してくれる人への尊敬・・このスポーツの特徴として人を尊敬すること、敬意を払うこと、この尊敬ということばがキーワードとなっているように感じます。

さて今年もあと残すところ２ヶ月程度となりました。今年は「キリストにある絆と一致」というテーマに沿って教会生活を共に送って参りました。どれぐらい教会の中で兄弟姉妹との絆と一致が強められたでしょうか？　クリスマス前のアドベントまでしばらく、どうしたら教会の兄弟姉妹の絆が深められるのか学んでゆきたいと願っています。今日はその一回目「互いを尊敬し合う」ということです。さっきのラグビーの話ではありませんが、いやラグビーどころか、「互いに尊敬し合う」ということが教会につながる一人一人にとって大切なことであると聖書は教えています。今日のみことばをもう一度読みます。

「兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。」

ローマ 12 章 10 節

＜兄弟愛をもって＞

聖書の中に愛するということも様々に表現されますが兄弟愛とはフィレオーと言って友情に近いものだと良く説明されます。それもありますが兄弟とは、日本語で、兄と弟とで「兄弟」と書きますが、アデルフォスという言葉が使われています。アというのが「同じ」とか「共通の」という意味で、デルフォスとは「胎」、「お腹」という意味です。つまり「同じ胎から産まれた者」、「同じおなかから生まれた者」という意味の言葉が使われているのです。ですから日本語としては、「兄弟」よりも「同胞」といった言葉の方がぴったりきます。つまり兄弟という言葉の特徴は兄弟だから男性だけを意味しているというわけではないし、友達ということでもなく、元は同じ母の胎から生まれた者であるということにあると言えます。ですからここでの「兄弟愛をもって」、というのは全てのクリスチャンはいろんな違いがあるけれどよく考えてみれば誰もが主イエスの十字架の贖いによって罪赦された者であり、キリストを信じることによって永遠のいのちを神から与えられた者、すなわち新しく生まれた者であるということです。このことにおいては全てのクリスチャンに違いはないのです。神の前にあってはただ神の憐みによって罪赦された罪人に過ぎない。これがクリスチャンの歩みを考える時の大前提です。

ただ、だからと言って私たちはすべての人を尊敬すべきだと言われても現実問題としては不可能なこ

とです。いつか、少しは可能になるかもしれませんが今すぐ全ての人を尊敬しなさいと言われると難しいものです。しかし、あなたの周りにいる人はいずれ天国で共に暮らすことになる人たちです。この礼拝が天国での礼拝のリハーサルであるように、天国での人間関係を覚えて今から良い人間関係を持つ練習をした方が良いと思いますが如何でしょうか？　こんな話をすると「あの人と一緒に・・」中には「あんな人と一緒に・・」なんてためらう人もいると思います。しかし神は「神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。」コリント第一 12:24 と言われます。これは私たちがもし、「あんな人が・・」と言っている人を神様はことさらに重んじ、その人の側について下さるということであり、それは私たちが退けているつもりが結局は自分が退けられるという結果に終わる可能性があるということを意味しています。

＜人を自分よりまさっていると思いなさい＞

12:10 には「尊敬をもって・・思いなさい」とあるので心に思っていることと受け止めがちですが「思いなさい」とは「考えなさい」という意味ではなく「尊敬しなさい」「敬意を表しなさい」ということです。ですからこれらのことばにはもっと積極的な意味合いがあります。ある聖書の訳では「互いに尊敬を示すことに秀でた者となりなさい」となっています。つまり尊敬の心を示すことにおいて熟達した者となりなさいということです。何かの行動を起こす、やってみるということです。ではどのようにしたら尊敬の心を示すことが出来るようになるのでしょうか？

１）相手の話に耳を傾けること

神様が私たちのどんなに自分勝手な祈り、思いつきのような祈りにも耳を傾けてくださるように、また主イエスがご自分の周りの人々の話をじっくりと聞かれたように兄弟姉妹に耳を傾けるべきです。傾聴ですね。答えをすぐに出すのではなく、すぐにアドバイスしようと言うのでもなく相手の話が全部終わるまで待つ必要があります。それが相手に敬意を示していることになります。またその場にいない人のことをどう話すかにも尊敬の心が表れます。陰口や噂話ほど人間関係を破壊するものはありません。箴言 16:28 に「ねじれ者は争いを巻き起こし、陰口をたたく者は親しい友を離れさせる。」とあります。

2）正直であると共に、機転を利かせること

機転を利かせるとは、話す前によく考えることです。どんなに正しいことであってもそれが弱い私たちの心に入ると罪深い影響を受けるからです。自分の語る言い方が聞き手にどのように伝わっているかは案外知らないものです。批判する時も、愛をもって伝えるならその真意が伝わることが多いものです。みことばにエペソ 4：15「愛をもって真理を語りなさい」と言われている通りです。真理、正しさだけを語っていても、愛に基づいていないならただ相手を責め、裁き続けていることになります。

3)変えようとするのではなく分かろうとすること

人は誰でも自分が変わるようにと要求されるよりも、理解してもらいたい、分かって欲しいと願うものです。自分に対しては人にそのようにかかわって欲しいと願うのに他人に対しては変わることを要求するのが私たちの弱さです。主イエスは「自分にしてもらいたいと望むとおり、人にもそのようにしなさい。」ルカ 6：31 と言われました。互いに相手の感情に心を配る必要があります。それが相手への敬意で

す。

4)裁くのではなく、寛大な心を持つこと

人間関係は競争や勝負ではありません。相手と意見が違っていても、思いやりと尊敬の心を忘れてはいけないのです。ローマ 14:12,13 には「こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう。」と書かれています。自分がどう思われるか、どう扱われるかと自分自身のことで心が一杯の人は他人との人間関係が競争的になったり、勝負的になりがちです。相手の発言や行動で一喜一憂な思いになります。人間関係において会話が勝負的、つまり勝った負けたとなる人は勝っても孤立し、負けると怒りや悲しみが起こりがちです。相手に尊敬、敬意を持っているなら良い関係が保たれます。

以上幾つかどのように尊敬の心を示したら良いのか挙げてみました。これらのことは相手があることですから自分一人が頑張ってどうにかなるものではありません。だからと言って神様にお任せしていたら自動的に進んでゆくものでもありません。

福音書には、弟子たちが誰が一番偉いか話し合っていた、と何度か記されています。しかもこの議論は、主イエスがエルサレムに行き、十字架にかけられる直前まで繰り返されました。そのような弟子たちに対し最後の晩餐の夜、主イエスは、おもむろに腰に手ぬぐいをかけ、弟子たちに、「あなたがたの足を洗おう」といわれました。そして、「主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです」と言われました。そしてまさに主イエスの復活、続く初代教会の時代に互いに尊敬し合う、麗しい交わりを持つに至ったのです。

主イエスが弟子たちのそんな弱さをご存知でも導き、世話し続けられたのは、今は気づかなくともやがて一人一人が主に用いられる者として歩むことを信じ、期待して関わり続けられたのです。私たちも人と敬意に満ちた良い絆を保つためには相当な失敗を重ねなければならないかもしれません。私も振り返ってみると自分中心的な思いの発言、余計なことを言って人を悲しませてしまったこと、数々の足りない部分が多くあったことが思い返されます。しかし、私たちが人を尊敬することにおいて訓練を受ける場はこの教会の交わり、数々のグループの交わりなのです。私たちは初めて会った人には親切に出来ますが、毎日会う人に対してはそう出来ないことが多いものです。どうしてでしょうか？　初めて会う人は互いに心傷つくかもしれないような関係が求められていないからです。しかし、それでは心傷つくことはないかもしれませんが成長するということもありません。神様は成長するために教会という場を与えておられます。

どうか聖霊に強めていただいて「尊敬を示すことに秀でた者」となれるよう、神に求めてまいりましょう。